



Title	William Blake の統合的芸術作品, The Marriage of Heaven and Hell
Author(s)	堀, 恵子
Citation	Osaka Literary Review. 1978, 17, p. 44-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

William Blake の統合的芸術作品, *The Marriage of Heaven and Hell*

堀 恵 子

序論

詩人、彫版家、画人、革命家、神秘主義者、幻視者…さまざまな名称が、Romantic Revival の先駆者であり、イギリスの最も偉大な天才の一人である William Blake に与えられてきた。この、単一名称で語れない存在こそが Blake なのであり、彼の “Illuminated Books”（彼自身の編み出した彩色印刷, illuminated printing による, poetry と visual art の統合形態を持つ作品）から poetry だけを取り出して論ずるという従来しばしば行なわれてきた方法は、彼の一面をうがつに留まるといわざるをえないだろう。Blake は必ずやその illumination の中に, poetry において語りつくせない何物かを盛り込んでいることと思われる。ことに、ここで取り上げる *The Marriage of Heaven and Hell* において彼は次のように述べて自らの illuminated printing の重要性を明示している。

But first the notion that man has a body distinct from his soul is to be expunged; this I shall do by printing in the infernal method, by corrosives, which in Hell are salutary and medicinal, melting apparent surfaces away, and displaying the infinite which was hid.

この小論文においては *The Marriage of Heaven and Hell* に即して、この統合的芸術作品を造り出した Blake の真意を究明し、後期予言書との関連にも言及したい。なお、この作品は “The Argument”, “The voice of the Devil”, “Memorable Fancies”, “Proverbs of Hell”, “A Song of Liberty” の5つを一まとめにしたものである。それぞれに一章をあてて論じようと思う。

I. "The Argument"

散文で書かれた本書における唯一の詩である "The Argument" はその名の示すごとく、難解なこの作品の主題の要約であり、作品理解の鍵を握る部分といえよう。"Rintrah roars & shakes his fires in the burden'd air; Hungry clouds swag on the deep." という不気味な描写で始まるこの詩の、冒頭と最後のくり返しを除く四スタンザが、人間の救済後の喜びにみちた繁栄を描いた *Isaiah* の第35章を下敷きにしていることは、Damon も述べているように明白である。

Once meek, and in a perilous path,
 The just man kept his course along
 The vale of death.

 Till the villain left the paths of ease,
 To walk in perilous paths, and drive
 The just man into barren climes.
 Now the sneaking serpent walks
 In mild humility,
 And the just man rages in the wilds
 Where lions roam.

さて、この場合の "the just man" とは一体誰のことであろうか。Blake の Thomas Butts 当ての手紙の中に、次のような一節がみられる。

I still & shall to Eternity Embrace Christianity and Adore him
 who is the Express image of God; but I have travel'd thro' Perils
 & Darkness not unlike a Champion. I have Conquer'd, and shall still
 Go on Conquering. Nothing can withstand the fury of my Course
 among the Stars of God & in the Abysses of the Accuser.¹⁾

この手紙における Blake の姿は "the just man" のそれとびたりと重なる。さすれば "the just man" は、正しき人一般であると同時に Blake 自身の姿であるともいえるだろう。ところで、自らを天才、賢者と認めて

いた Blake は次のごとく述べている。

He who can be bound down is No Genius. Genius cannot be Bound;
it may be Render'd Indignant & Outrageous.

“Oppression makes the Wise Man Mad.” SOLOMON.²⁾

このことから、正しき人 Blake の怒りは、“the villain”によって荒野へ追いやられ、自由を束縛されていることに対するものであろうと推測される。では、Blake をかくも憤慨させている oppression とは何であろうか。“Memorable Fancy”の最後で彼は“One Law for the Lion & Ox is Oppression.”という叫びを発しているが、まさにその法のためだと考えられる。そして、読み進めば、Lion と Ox がそれぞれ、生産的、創造的人間“the Prolific”と、消費的、非創造的人間“the Devourer”に対応していることが判明する。その“the Prolific”の代表たる Blake が憤っている法律とは何か。

ここで、この作品の制作年代に触れておかねばならないだろう。“The Argument”に続く Plate 3 の散文に目を投ずれば、我々は“As a new heaven is begun, and it is now thirty-three years since its advent,”なる箇所を見出す。これが Swedenborg の、最後の審判は1757年（これは奇しくも Blake 生誕の年である）になされたとの言葉をふまえているのが明らかなことから、この作品は一般に1790年の作とされているようである。しかし、Plate の下方の illumination に注目する時、Plate に書かれた内容とは全く無関係なこの構図が、最後の“A Song of Liberty”との明らかな対応を示していることに気づくのである。すなわち、産みの苦しみにうめく女性は“the Eternal Female”, Enitharmon であり、両手を広げ生まれ出ようとしている赤ん坊は“the new born terror”, つまり物質世界の革命の具現たる Orc なのだ。このことは“A Song of Liberty”が後から書かれて付加されたものではなく、同時進行的なものであったことを暗示している。そして“A Song of Liberty”は1792年以降の作



As a new heaven is begun, and it is now thirty-three years since its advent: the Eternal Hell revives. And lo! Swedenborg is the Angel sitting at the tomb; his writings are the linen clothes folded up. Now is the dominion of Edom, & the return of Adam into Paradise; see Isaiah XXXIV & XXXV Chap:

Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.

From these contraries spring what the religious call Good & Evil. Good is the passive that obeys Reason. Evil is the active springing from Energy.

Good is Heaven. Evil is Hell.



であることが分っているので、Plate 3 も、それ以前の彫版ではないと推察できよう。

イギリスにおける1792年は一つの転機であり、扇動的な書物の出版を禁止する法律の公布された年である。当時、急進派とも交際のあった Blake の怒りの対象は、実はこの *oppressive* な法律だったのではなかろうか。イギリスにもフランス革命のような革命の到来を期待しながら、直接的表現に訴えることを抑圧された正しき者の叫びではなかったのか。こう考えれば、“The Argument”における大海原に低くたれこめる“Hungry clouds”は血に飢えた戦いの雲である³⁾との Erdman の説も、容易に理解されるのである。

それでは、なぜ“it is now thirty-three years since its advent”などと記したのか。これに対しては、Damon の次のような指摘が答えを与えてくれるであろう。

Blake was too fond of round numbers such as these. Over and over again we find him frankly adding or subtracting years in order to make some date seem significant and memorable.⁴⁾

さて、“thirty-three years”でまず思い起こされるのは、Jesus Christ が十字架上の死とその三日後の復活をなされたのが33才の時、ということであろう。さらに、Plate 6 の“the Jehovah of the Bible being no other than [the Devil *del.*] he who dwells in flaming fire. Know that after Christ's death, he became Jehovah.”なるところから、Plate 3 の上部を占める燃えさかる炎の中の人物は、死者のうちからよみがえられた Christ であると分る。Christ の復活は、人類の救いと復活を暗示するものである。さらに、“Now is the dominion of Edom, & the return of Adam into Paradise”と述べていることや、“The Argument”が、人間の救済後の喜びにみちた繁栄を描いた *Isaiah* の第35章を下敷きにしていることも考え合わせると、33才(彼の筆に従えば)の Blake は、

人類に救いと復活をもたらすという神聖なる使命を帯びて、この作品を世に送り出したということになるだろう。さらに本文を見てゆくと“new heaven”の“heaven”および“Swedenborg”は、取るに足らぬものであるとの彼の考えを示すごとく消え入りそうなうす水色で描かれ、それに対して“Contraries”と“Human existence”は、このことが重要な論点であることを明示すべく目立つ濃い青色で書かれていることに気がつく。これらについては、後の章で触れることにする。

II. “The voice of the Devil”

“The voice of the Devil”というタイトルを持つ Plate 4 は次のように始まる。“All Bibles or sacred codes have been the causes of the following Errors.” 悪魔の声を借りて、Blake は三つの誤った考えを述べ、次にそれらと反対の真実を告げる。彼は“The Whole Bible is fill'd with Imagination & Visions from End to End & not with Moral Virtues.”⁵⁾ という考えを持っていたので、この Plate に刻まれた Errors は、聖書や聖典を表面にとらわれて読み、道徳的解釈を施したために生まれたものとみているのであろう。Swedenborg も又、その著 *Heaven and Hell* に次のように書いている。

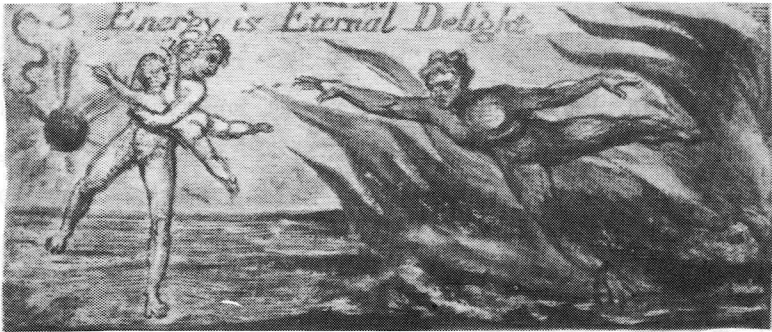
But those who so believe are ignorant of the arcana that lie hid in every particular of the Word. For in every particular of the Word there is an internal sense which treats of things spiritual and heavenly, not of things natural and worldly which are treated of in the sense of the letter.⁶⁾

このように、文字にとらわれずに聖書の内的な真の意味を明らかにしようという試みにおいて同様であるにせよ、両者の解釈には大きな食い違いが生じている。そこで Blake の“The voice of the Devil”に即して二人の解釈を比較してみよう。

Let it be understood that man is wholly such as his interiors are, and not such as his exteriors are separate from his interiors. This is because his interiors belong to his spirit, and the life of his spirit is the life of man, for from it his body lives;⁷⁾

Swedenborg のこのような霊肉分離及び、霊こそ人間の生命であるとする考えに対し、Blake の Devil の声は “Man has no Body distinct from his Soul.” と叫び、 “Reason is the bound or outward circumference of Energy.” と明言するのだ。責め苦については、Swedenborg は地獄における責め苦の存在を信じ、 “The Lord permits torments in the hells because in no other way can evils be restrained and subdued.”⁸⁾ と述べているが、Blake の方は、自らの Energy に従って行動しても神からの責め苦はないものと確信している。それどころか “Energy is Eternal Delight.” と言うのだ。この確信は、*Jerusalem* において明確になる罪のゆるしの考えに通ずるものであろう。以上のようなことから、Swedenborg の *Heaven and Hell* は、Devil のいう三つの誤った考えの繰り返しに過ぎないことが分る。

さて、この Plate の下方に目を転ずれば、Erdman が “perhaps showing the jealous separation of soul and body.”⁹⁾ と解釈している illumination を見出す。しかし、この解釈ではどうも赤ん坊の説明がつかない。そこで Plate 3 の赤ん坊の姿を思い浮かべれば、両手を広げ、助けを求めるように右の人物の方へ顔を向けているこの赤ん坊が、それと同一人、すなわち革命の象徴たる Orc であろうと推し測られるのである。右側の、地獄の怒りの猛火に包まれた人物は、その足の鎖から、三番目の “Memorable Fancy” に描かれている鎖につながれた巨人、いいかえれば “the Prolific” であると思われる。そうすると、革命の子を彼から無理矢理引き離している左の人物は “the Devourer” であろう。足の鎖は、先に述べた1792年の法律のことだと思われる。



以上のように、この Plate においても Plate 3と同様、Blake の、宗教、政治、両面での革命の意図が、本文と illumination との奇異でありながら調和ある統合のうちに、明らかにされているのである。

III “Memorable Fancies”

本文のうち、かなりの部分を占める五つの怪異場面描写の “Memorable Fancies” は恐らく Swedenborg の visions, “Memorable Relations” を念頭に置いた名称であろう。不気味なまでに力強い生命の躍動が感じられる筆致は、Blake ならではのものといえるだろう。その最初のものは “Proverbs of Hell” への導入部であり、次章で触れることにする。

二番目には、予言者 Isaiah, Ezekiel と食事を供にする Blake が描かれている。Isaiah は彼の五官がすべての物の中に infinite なるものを見出したことを告げ、Ezekiel も又、他の人々にも infinite なものを知覚させたいとの意志を述べる。次に Blake は、世界が6000年後に焼き尽くされ、すべてが無限で神聖なものに変わるという古来の言い伝えが真実であること (America などを見ると、彼が政治的レベルでは France や America の革命の中に、この言い伝えの実現を見ていたことは明白である)、そしてそれを達成するために、まず霊肉分離の観念を一掃せねばならないが、それを、隠されている infinite を引き出す地獄の印刷法によって行なおうと言う。他の人にも infinite をみせたいとの意志に、後に、より明確

になる、予言者としての Blake の姿がうかがえるだろう。

三番目は地獄の印刷所の描写だが、第一室から第五室まで、それぞれに Dragon-Man, Viper, Eagle, Lion, Unnam'd forms がいて、第六室にいる人間達が作られた金属を受けとめ、本の形にする、と記されている。明らかに Blake は読者に、illuminated printing の方法を吐露しているのだ。部屋を占めるそれぞれの生き物が何の象徴であるかという研究は従来よくなされてきたが、その数だけに焦点をあててみるのもおもしろい。すなわち、第五室までが人間の五官に対応していて、第六室、すなわち五官を超えたところ、vision や imagination の世界にいる人間、Blake がこの本を作っていることの暗示と考えるのである。この Plate の illumination はその考えに、さらに確証を与えてくれそうだ。鷲は "Proverbs of Hell"



に、"When thou seest an Eagle, thou seest a portion of Genius." とあるように天才の象徴であり、恐らくは Blake 自身をさすのだろう。巨大なへびは、Plate 5 の "But in the Book of Job, Milton's Messiah is call'd Satan." のすぐ後ろにも這っている。これは Milton's Messiah の象徴であろうが、*Paradise Lost* においては "the Governor or Reason is call'd Messiah." だと Blake は述べている。ゆえに、鷲にかまれているへびは Reason の象徴とみることができる。さらに、そのとぐろ巻きの数が五であることから五官をも象徴していると見る。さすれば、

天才 Blake が Reason や五官に阻まれず、むしろそれらを統制下におきつつ Illuminated Books を創作したのだということを読者に暗示しようとしているといえないであらうか。

四番目の “Memorable Fancy” は、Blake と天使が互いの永遠の運命を見せ合うという場面である。ここでは、当時の既成教会を monkey house にたとえ、天使のする仕事は Analytics にすぎないときめ付ける。さらに、新教会を樹立したと自負する Swedenborg を monkey showman にたとえて嘲笑している。Swedenborg はその著の title を *Heaven and Hell* としたにもかかわらず、宗教的な Angels とばかり語り合い、宗教を嫌う Devils とは語り合わなかったため、古い誤った考えのくり返しを書いたにすぎないのだと Blake は非難しているが、それが *The Marriage of Heaven and Hell* なる title を有するこの作品成立の一因ともいえよう。

ここにおいて Blake は、自ら Angel と会話し、地獄へ降りてゆくのみならず、Angel と Devil の会話さえ描いている。それが、最後の “Memorable Fancy” である。ここでは、彼の God に対する考えが Devil の発言を通して示される。

“The worship of God is: Honouring his gifts in other men, each according to his genius, and loving the greatest men best: those who envy or calumniate great men hate God; for there is no other God.”

この考えは、後に明確になる次のような思想の先駆けといえるだろう。

Man is All Imagination. God is Man & exists in us & we in him.¹⁰⁾

The Eternal Body of Man is The Imagination, that is,
 God himself }
 The Divine Body } Jesus: we are his Members.

It manifests itself in his Works of Art (In Eternity All is Vision)¹¹⁾

さて、天使は、ついに悪魔の言葉に心動かされ、炎の中に燃え尽き Elijah になって復活し、しばしば Blake と共に、聖書を地獄的 又は 悪魔的

な意味において読むことになる。さらに Blake は、自分の持っている “The Bible of Hell” を世に公表することを 予言するのである。この “The Bible of Hell” とは何かは議論を呼ぶところだが、私は Damon の言うように、予言書全体がそれに該当するものとする。予言書すべてを、一つの壮大な叙事詩 *The Four Zoas* にまとめようとした彼の構想から、これこそ “The Bible of Hell” にちがいないと思われる。“The Bible of Hell” 出版の意図を明確に示した唯一の作品である *The Marriage of Heaven and Hell* は、いわばそれへの導入的作品であり、彼の真意は “The Bible of Hell” を見ることによって、より明らかにされるであろう。しかし *The Four Zoas* は未完のまま終わり、*Milton* や *Jerusalem* の中に一部が移されていることから、これら三作を、結論の章で概観してみたい。

IV “Proverbs of Hell”

Blake の一つの特徴といわれる格言的傾向が十分に表わされているのが、この “Proverbs of Hell” である。

その導入部である、最初の “Memorable Fancy” の冒頭 “As I was walking among the fires of hell, delighted with the enjoyments of Genius,” のすぐ上方に、頭を下にして炎の中に落ち込む人物が描かれている。この構図は Plate 5 の上部にもみられ、Keynes はこの人物を “energetic man” と考え、全体が三番目の Error “That God will torment Man in Eternity for following his Energies.” に対応すると述べている¹²⁾ が、Swedenborg の次の言葉は、別な解釈を可能にするであろう。

Those who enter from a burning love of evil appear to be cast headlong, with the head downwards and the feet upwards From all this it can be seen that the Lord casts no one into hell, but every one casts himself into hell, both while he is living in the world and also after death when he comes among spirits.¹³⁾

Blake が、Swedenborg を非難しながらも、その説のあるものは明らかに採用していることをかんがみると、この人物は、自らの熱烈な意志で地獄の訪問のために炎の深淵に落ち込む Blake の姿とみることができよう。

さて、Blake がそこで集めてきたのが “Proverbs of Hell” である。同一趣旨の格言が幾つかあるが、それらは、規則に束縛されず衝動により行動するという地獄的性格を強調するかのごとく、順不同に語られている。ここでは、便宜上、そのうちの幾つかを、グループに分けて論じたい。

まず、excess に対する彼の賛辞がみられる。

- The road of excess leads to the palace of wisdom.
- The cistern contains: the fountain overflows.
- Exuberance is Beauty.

そして、“You never know what is enough unless you know what is more than enough.” なるあざやかな paradox をうちたてる。次に、欲しながら行動しないことは害悪の最たるものだという考えは、以下の二つの Proverbs にみられる。

- He who desires but acts not, breeds pestilence.
- Sooner murder an infant in its cradle than nurse unacted desires.

又、両極端は似通ったものだということが述べられるが、これは “Contraries” は原初の形態においては一つであったという彼の思想を反映するものであろう。

- If the fool would persist in his folly he would become wise.
- Excess of sorrow laughs. Excess of joy weeps.

さらに、四番目の “Memorable Fancy” で、因襲的な dogma を変えようとしないうちを溜まり水のたとえで非難したが、同様の趣旨のものが次の二つである。

- Expect poison from the standing water.
- The best wine is the oldest, the best water the newest.

この作品の最も重要な主題の一つは “Human existence” であろうと一章

でも書いたが、最後に、人間存在というものに重きをおく彼の傾向を、格言の中に認めたい。

- ・ Where man is not, nature is barren.
- ・ The eyes of fire, the nostrils of air, the mouth of water, the beard of earth.

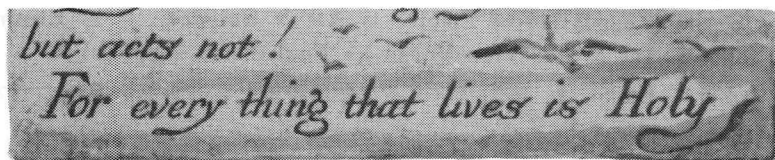
さて、次の Plate 11 で Blake は、古き時代 (“ages of imagination” のことだろう) の詩人達は知覚できるすべての物象を神々や地霊と結びつけていたが、やがて宗教組織ができ、それを利用する者も現われて、今では “men forgot that All deities reside in the human breast.” だと嘆く。ここに、人間を divine なものとして重視し、愛する Blake の姿が、より鮮明に浮き彫りにされていると思われる。

V “A Song of Liberty”

一見非常に宗教的なこの作品の最後の “A Song of Liberty” の存在は、作品全体に政治的色彩を付加している。前述のごとく 1792 年の法律のため、革命への直接的言及は極力避け、後に彼の予言書で活躍することになる幾人かの神話的人物を登場させて、アメリカやフランスの革命の歴史、及び、彼の予言を語っているが、そのことがかえてこの歌を、彼の革命詩 *The French Revolution* よりも文学的魅力において数段勝ったものになっているのは皮肉である。

概観すれば、次のようになる。Enitharmon の産みの苦しみのうめき声が全世界に響き、革命の寵児の誕生間近なことが知れ渡るが、イギリスは恐怖に震えるだけで、それに対応できない。これに反して、アメリカでは革命が起こり、それがフランス革命を誘発する。“new born terror” たる Orc は、“starry king” のちの Urizen に立ち向かい、ついには屈服させ、“Empire is No More!” と叫ぶ。このように、アメリカ及びフランス革命への賛辞と、イギリスも同様に帝国は存在しなくなるだろうとの Blake の予言が述べられ、Chorus では、国王と通じている Priests の権

威失墜が予言されるのである。そして、彼の他の作品中にもしばしば見出されるような訴えで、この偉大な作品は幕を閉じる。“For every thing that lives is Holy.”その真上には、自由の歌の結びにふさわしく、一羽の大きな鳥 (Imagination の象徴) に導かれて空高く飛翔する五羽の鳥 (five senses の象徴) が描かれている。



結論

この作品成立の直接的契機は、確かに1792年の *oppressive* な法律や Swedenborg の *Heaven and Hell* に対する反発にあったかもしれない。しかし、この作品は、単に、そういった具体的対象への非難に終わっているのではない。

ここで、“For every thing that lives is Holy.”という、作品の最後の叫びを思い起こしてみよう。この言葉のうちに、彼の思いのすべてが込められているといっても過言ではないだろう。彼にとって God は、決して、遠い、抽象的存在ではなく、すべての生けるもの、わけでも人間存在のうちに認められるものだった。それゆえ、人間は神聖であるはずだが、現在では、宗教組織が因襲的道德のみを説き、人間の胸の内なる神性を忘れさせ、共に神聖であるはずの、消費的、支配者階級 “the Devourer” と、生産的、被支配者階級 “the Prolific” においては、前者が後者を抑圧し、その神聖さを汚している。Blake は、このような現状を前に、人間存在に対する限りない愛をもって、自らの信ずる真理の光により、まことの救いと復活をもたらすという神聖な使命に目覚めたのだと思われる。

そして彼は、自らの使命を果たすためには、宗教的にも政治的にも壮大な革命が必要と考えたのであろう。が、それは、急進的行動に訴えるもの

ではなかった。彼は、“Christianity is Art.”¹⁴⁾ と言って、両者を同一視する。又、彼は、Art による圧政の打破が可能だとの考えを次のように述べている。

The Arts & Sciences are the Destruction of Tyrannies or Bad Governments.¹⁵⁾

The Foundation of Empire is Art & Science. . . . Empire follows Art & Not Vice Versa as Englishmen suppose.¹⁶⁾

このように Blake は、実力に訴える革命に勝るとも劣らない芸術の力で、宗教的、政治的圧迫を打破し、人間を救済、復活に導こうとしたのである。

ここで、彼の“The Bible of Hell”，つまり *The Four Zoas, Milton, Jerusalem* を概観してみよう。人間の四つの要素（肉体、理性、感情、想像力）の象徴である Four Zoas は、原初は調和ある状態を保っていたが、ある時、互いに侵し合いを始め、それぞれの妻、Emanation と分離し、分裂の極みに達する。しかし、これらの分離した Zoas は Los (Blake の分身ともいえる) の再生活動により、ついには、人間であり同時にイギリスでもある Albion の胸の中の、それぞれの当然占めるべき位置に戻り、調和ある状態を取り戻す。以上が大意だが、Blake は、人間の fall を divisions への fall とみて、それらが元の調和ある一つの状態に戻った時、人間の救いと復活が達成され则认为たのだ。

しかし、Blake は、*The Marriage of Heaven and Hell* においては、その title が示すごとく、まず、“Contraries”の統合により、それを達成しようとしている。彼は Plate 3 に言う。

Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.

又、*Jerusalem* でも “Negations are not Contraries: Contraries mutually Exist”¹⁷⁾ と述べている。これらから、彼が、“Contraries”は互いに否定し合うものではなく、共に人間存在に必要で、それらがなけれ

ば進歩はない、といったものだと考えていた事が分る。それゆえ、Energy に対する Reason の専横、Body に対する Soul の優越、“the Prolific” に対する “the Devourer” の抑圧、すべてが人間存在を現在の墮落の状態に追い込んだ原因であると確信し、それらが互いに侵し合うことのない、調和ある原初の一つの状態に戻る時こそ、人間の真の救いと復活の達成の時であると考えたのだ。そして、抑圧されたものを、当然あるべき位置に戻すべく試みたのが、画期的な価値の転倒であった。

最後に、彼の用いた印刷方法、過程、本の体裁にも注目すべきである。まず、作品が “The Argument” 以下五つの主題の統合であり、“Memorable Fancies” が五つ、さらに地獄の印刷所の描写では、人間のいる部屋を除く部屋数が五つであること。これらすべては、本書が Blake の Imagination による五官の統合による作品であることの暗示であろう。従って、彼の notebook から集めた scrapbook だというような批判は全くのはずれといわなければならない。又、精神的創造物たる literature と、肉体を表現しうる visual art との調和ある統合形態をとることにより、Soul と Body という “Contraries” の不可分性をほのめかす。その印刷法は、表面を溶かし去り、隠れた infinite をあらわにする銅版によるものである。さらに彼は、構想、彫版、印刷等、すべての過程を自分一人（妻は Emanation であり、彼の半身）で成し遂げ、divisions を回避し、synthesis による oneness の希求を表現している。

以上により、文章はもとより、印刷方法、制作過程、本の体裁、どれをとっても彼の真意を反映していないものはないことが分る。これこそが、この作品において彼に illuminated printing の重要性を誇らかに語らしめた理由である。これこそが、あらゆる oppression を打破しうる Art、全く新しい、独創的な統合芸術なのだ。このように、唯一の真理をみせ、迷える人間を覚醒させ、救いと復活に導くという使命の実現を、一つの偉大な統合的芸術作品 *The Marriage of Heaven and Hell* に託した天才 Blake は、時代を超え、我々の心にも、壮絶なまでにひたむきな姿で語り

かけてくるのである。

注

- 1) Geoffrey Keynes (ed.), *The Complete Writings of William Blake* (London: Oxford University Press, 1969), pp. 815-816.
- 2) *Ibid.*, p. 472.
- 3) David V. Erdman, *Blake: Prophet Against Empire* (Princeton: Princeton University Press, 1954), p. 174.
- 4) S. Foster Damon, *William Blake: His Philosophy and Symbols* (London: Dawsons of Pall Mall, 1969), p. 97.
- 5) Keynes, *op. cit.*, p. 774.
- 6) Emanuel Swedenborg, *Heaven and Hell* (New York: Swedenborg Foundation, 1952), p. 2.
- 7) *Ibid.*, p. 454.
- 8) *Ibid.*, p. 548.
- 9) David V. Erdman, *The Illuminated Blake* (New York: Anchor Press, 1974), pp. 101-102.
- 10) Keynes, *op. cit.*, p. 775.
- 11) *Ibid.*, p. 776.
- 12) Geoffrey Keynes, *Blake: The Marriage of Heaven and Hell* (London & New York: Oxford University Press, 1975), p. 38.
- 13) Swedenborg, *op. cit.*, pp. 512-513.
- 14) Keynes (ed.), *op. cit.*, p. 777.
- 15) *Ibid.*, p. 445.
- 16) *Loc. cit.*
- 17) *Ibid.*, p. 639.

補注 本文中の写真はすべて Geoffrey Keynes の *Blake: The Marriage of Heaven and Hell* (Oxford University Press, 1975) からのものである。